

大伴家持をめぐる相聞歌群(一)

—— 女郎歌の諸相 ——

島 田 裕 子

一

大伴家持はその青春時代に、女王、女郎イラツメ(郎女)、娘子ワトメといった多くの女性達から相聞歌を贈られた。笠女郎のように秀れた歌を詠んだものもあれば、家持に贈ったことで歌が残っただけのものもある。そして家持に贈られた相聞歌の多くは、笠女郎や紀女郎といった才能に恵まれた歌人のものではなく、後者の凡庸な歌である。これらの歌を詠んだ女性達は短歌という定型律を思うままに使いこなし自在に歌を作っていたのではない。

左のような記述が万葉集にはある。

大伴宿禰稻公、田村大嬢に贈る歌一首 大伴宿禰麻呂卿の女なり

相見ずは恋ひざらましを妹をみてもとなくのみ恋ひばいかに
せむ(四・五八六)

右の一首、姉坂上郎女の作なり。

左注によると大伴宿禰稻公は相聞歌を姉に代作させて贈っていた。

また家持の妻坂上大嬢も歌を詠むのは苦手なようで、家持に代作を頼んでいる。

家婦の京に在す尊母に贈らむために、詠へられて作る歌一首

大伴家持をめぐる相聞歌群(一) —— 女郎歌の諸相 ——

併せて短歌

このような例もあり、歌を詠むのは、古の人々にとつてもけつこう難しいことであつたらしい。

家持に相聞歌を贈った女郎や女王、そして娘子達の多くは専門歌人を志した人達ではなく、恋の成就という実用の目的で歌を作っており、五七五七七という定型の短歌を詠むには学習もし推敲に苦しんだ跡も窺える。坂上大嬢が家持に贈った天平四年から六・七年の相聞歌の中の一首に

生きてあらば見まくも知らずなにかも死なむよ妹と夢に見え

つる(四・五八一)

がある。この歌は解釈が諸注釈で分かれているものである。これは、今は我は死なむよ我が背生けりとも我に寄るべしと言ふといは
なくに

今は我は死なむよ我妹逢はずして思ひ渡れば安けくもなし

(四・六八四 大伴坂上郎女)

今は我は死なむよ我が背恋すれば一夜一日も安けくもなし

(十二・二八六九 作者未詳)

今は我は死なむよ我が背恋すれば一夜一日も安けくもなし

(十二・二九三六 作者未詳)

よしゑやし死なむよ我妹生けりともかくのみこそ我が恋ひ渡り
なめ
(十三・三二九八 作者未詳)

以上のような類同歌をもち、この類同歌を下敷にして作られた歌であるが、家持の歌への返歌であり、家持の歌が載っていないことで歌の解釈をわかりにくくしている。

『拾穂抄』や『万葉集童蒙抄』には、初句より第四句までの「生きてあらば見まくも知らずなにしかも死なむよ妹」を大嬢に家持が夢の中で語った言葉とする。また、『万葉集古義』は初句、二句、四句だけの「生きてあらば見まくも知らず」「死なむよ妹」を家持の言葉ととる。これに対して、四句だけを家持の言葉ととる『万葉集代匠記』『万葉集玉の小琴』『万葉集全註釈』(武田祐吉)、がある。これは「生きてあたら逢へるかも知れませんが、何だつて、死にますよなどと、あなたが夢に見えたのでせう」(『万葉集全註釈』)という解釈になる。家持の言葉としてどの句を探るかで解釈が異ってくる。このように解釈が揺れるのは、単に対となる家持の歌が残っていないということだけでなく、結局は歌そのものの作り方が明解でなく未熟であるためと考えられないだろうか。この歌は、母坂上郎女の代作とも言われているが、屈折の多い坂上郎女の先行歌にしてももっと明解に意味が分かる。坂上郎女ならば技巧は凝らしても直載に意味が伝わる明快な歌を作り得たであろう。坂上大嬢の歌は、母坂上郎女の歌や先行歌にひきづられてようやく作り上げたという感があり、明快さに欠けるのは大嬢自身の作歌力のせいであると考えられる。

さてこのように天平の貴族の作歌状況をみていくと、先に述べ

たように、歌は自然に湧いてきて詠まれるといったものではなく、歌を詠むための歌字びも行われ、苦吟もしていたであろうと思われる。天平の貴族そしてそれを支える下級官僚の娘達は、どのように歌と関わり歌を作り享受していたのであろうか。家持に贈られた相聞歌は年代が規定され、贈り主の年齢も作歌の場もある程度規定される。この限定された相聞歌群を検討していけば、当時の一般的な作歌状況が明らかになるであろう。また伊藤博氏が「後期万葉の人々が主として巻十一や巻十二を一古典として文飾的に習い」とた(『万葉集相聞の世界』)と指摘されている、その実相も見ることができよう。以上のような問いをもつて、家持に贈られた相聞歌群を検証していきたい。

二

家持の青春時代に相聞歌を贈った女性達の中で、題詞、左注、返歌等より確定できる人々は次のようである。また、名がわかる者のみ挙げた。

坂上大嬢、笠女郎、紀女郎、山口女王、大神女郎、中臣女郎、河内百枝娘子、空部麻蘇娘子、日置長枝娘子、粟田女娘子、平群氏女郎

彼女達は、家持と同時代人で年齢的にも近く年齢差のあるものでも十歳は越えないだろう。ここで同じ大伴氏で閨秀歌人坂上郎女を母とする坂上大嬢はその文学的環境が抜群によいたために、また父に笠金村の名も挙げられている笠女郎もその歌才と文学的環境が一般的でないために除いた。加えて紀女郎も家持との相聞往来以外に歌が

採られ歌人として才能のあつた人と考えられるので除いた。残りの女性達は専門歌人でもなく並はずれた歌才も文学環境もない。彼女達の歌い方を調べれば、家持と同時代の人々の作歌状況の実相が分かるのではないか。このような視点から残りの女性達の相聞歌を調べていく。

家持をめぐる女性達は、女王一名の他は女郎と娘子である。この女郎と娘子については、婚姻経験の有無で分け、「女郎は郎女とも書きイラツメと訓んでゐるが、これは婚姻した女、或は婚姻したところのある女を云ふ……娘子は未婚の婦人だが、所謂未婚女であつたか否かは保証の限りではない」（尾山篤二郎氏「大伴家持の研究」）「娘子すなはち処女」（川田順氏『万葉集大成・第十卷』）「大伴家持」と分け、山本健吉氏もこの説を支持している（『日本詩人選・大伴家持』）。しかし、小野寛氏は「郎女および女郎に冠せられた名はその生家の氏の名である」と言い、「娘子と名のつく女性に遊行女郎か女官であつた」とする。特に家持への贈歌のある娘子達は「女官であつた」（小野寛氏『大伴家持研究』）と分ける。また藤原芳男氏は娘子は女郎より身分の低い家の娘であると言ふ（『万葉』異号所収「万葉の郎女」）。女郎や娘子の歌の実態をみれば、女郎は氏族の高い身分をもつ子女。娘子は後宮に働く女官ととつてよいだらう。

三

(1) 山口女王。

女王は皇族の血統をうけた姫君である。山口女王は伝未詳。家持に六首の相聞歌を贈っている。それ以外に歌は載っていない。

大伴家持をめぐる相聞歌群(一) —— 女郎歌の諸相 ——

〈a〉物思ふと人に見えじとなまじひに常に思へりありそかねつる。
(四・六一三)

上句は「物思ふと人に見えじ下紐の下ゆ恋ふるに見を経にける」(十五・三七〇八)の遣新羅大使安倍継麻呂の歌と類同表現をもっている。

〈b〉相思はぬ人をやもとな白たへの袖ひつまで音のみし泣かも
(四・六一四)

この歌の句ごとの類同表現は卷十一、卷十二に見つけることができる。また卷十や卷十五にもある。

相思はぬ妹をやもとな昔の根の長き春日を思ひ暮らさむ
(十・一九三四)

……白たへの衣ひづちて 立ち留まり 我に語らく なにし
かも もとなとぶらふ 聞けば 音のみし 泣かゆ……
(二・二三〇 笠金村歌集)

bの四・六一四歌は右に挙げた三首と特に類似表現をもっており、とりわけ十・一九三四と二・二三〇歌の趣きを下敷にして組み合わせ作り上げている。

〈c〉我が背子は相思はずともしきたへの君が枕は夢に見えこそ
(四・六一五)

「しきたえの」は「枕」に掛かる枕詞。別表を見れば分布が詳しくわかるが、卷十一に集中、次に卷十二に多く用いられた枕詞である。「夢に見えこそ」の類句は八例あり、その表現は卷二や卷十一、卷十二に源を求められる。人麻呂歌集歌や人麻呂作歌といった古い時代の歌の表現と重なる部分があり、一首の印象は古風である。類歌

こそないが十一・二五〇一、十一・二六三四の人麻呂歌集の「夢に見えこそ」と、結句の表現はかなり古い。

〈d〉 剣大刀名の惜しけくも我はなし君に逢はずて年の経ぬれば

(四・六一六)

「剣大刀」は「名」の枕詞。柿本人麻呂の挽歌の「剣大刀身に副へ寝けむ」(二・二二七)や「剣大刀身に副へ寝ねば」(二・一九四)が古いものである。また人麻呂歌集の「我妹子に恋ひし渡れば剣大刀名の惜しけくも思ひかねつも」(十一・二四九九)はさらに時代を遡るものと考えられる。

み空行く名の惜しけくも我はなし逢はぬ日まねく年の経ぬれば

(十二・二八七九)

剣大刀名の惜しけくも我はなしこのころの間の恋の繁きに

(十二・二九八四)

思い遣るたどきも我は今はなし君に逢はずて年の経ぬれば

(十三・三二六二)

湊入りに葦別け小舟障り多み君に逢はずて年を経にける

(十二・二九九八)

d歌は右のような巻十二の歌をもとにして詠まれる。特に、十二・二九八四の上句と十三・三二六一歌及びその類同歌十二・二九九八の下句とを組み合わせたような歌であり、このような先行歌の荒っぽい組成の歌に、天平後期の人々が歌を作り始める、歌学びの始発の様相を生き生きと見てとることができる。加えて言えば、四・六一五と六一六とは柿本人麻呂の

吉備津采女の死にし時に、柿本朝臣人麻呂の作る歌一首

并せて短歌

……梓弓 音聞く我も おほに見しこと 悔やしきを しまった
の 手枕まきて 剣大刀 身に副へ寝けむ 若草の その夫
の子は さぶしみか 思ひて寝らむ 悔やしみか 思ひ恋ふら
む…… (二・二二七)

の挽歌より着想を得ているようだ。

〈e〉 廬辺より満ち来る潮のいやましに思へか君が忘れかねつる

(四・六一七)

二句までは「いやましに」を起こす序となつてゐる。これは

湊廻に満ち来る潮のいやましに恋は余れど忘れぬかも

(十二・三二五九)

……長門の浦に 朝なぎに 満ち来る潮の 夕なぎに 寄せ来る波の その潮の いやますますに その波の いやしくしくに 我妹子に 恋ひつつ来れば…… (十三・三二四三)

の二首に類似している。家持は後に

沖辺より満ち来る塩のいや増に我が思ふ君がみ舟かもかれ

(十八・四〇四五)

と四・六一七をはじめとして十二・三二五九、十三・三二四三を下敷きに歌を作っている。

〈f〉 秋萩に置きたる露の風吹きて落つる涙は留めかねつも

(八・一六一七)

巻八の相聞の部立に入る歌で、題詞には「山口女王、大伴宿禰家持に贈る歌一首」とある。「秋芽子」は巻八と巻十に集中して詠まれる。萩及び秋芽子が巻十一、巻十二に全く詠まれてないのは不自

然である。萩が二・一二〇の弓削皇子の歌、二・二三二の金村歌集
中の志貴皇子への挽歌に古くから詠まれていることから考えて、
元々卷十一・十二にあつた萩の歌をも編集の時に卷十に集めてし
まったために卷十一・十二に全くないとも考えられる。これは卷十
の重要な詠物、「うぐひす」についても言える。また「ほととぎす」
も卷十二・三〇九九に一首あるのみで作者未詳歌は卷十に集中して
いる。卷十一、卷十二と卷八は時代的にも歌の質的にも異なってい
ると考えられるが、これらの詠物の偏りは、卷々の編纂の在り方に
起因しているのではないだろうか。

さて山口女王の六首をみてきたが、**〈b〉**四・六一四歌は、十・
一九三四と二・二三〇を合わせて作ったもの。**〈d〉**四・六一六歌
は十二・二八七九、二九八四及び十二・二九六〇、三二六一と、類
同歌が多い、**〈e〉**四・六一七歌は十二・三二五九や十三・三二四
三からの影響が濃く全体に模倣性が強い。また卷十一、十二の古今
相聞往来歌類以外にも卷二とも表現が類似する句もあり、歌柄の古
風な印象はこのあたりより来ている。

(2) 大神女郎

大神女郎は伝未詳。大神氏は九州北部の古代氏族で宇佐大神氏と
豊後大神氏の二氏があるが、この大神氏は、その源の大和三輪氏を
指す。大物主大神を祀る奈良桜井市三輪山を中心とする古代豪族の
子孫であろう。壬申の乱の功臣三輪朝臣高市麻呂、後の大神大夫等
を出す。大神女郎はこの大三輪氏の高貴な氏姫であろう。女郎は二
首、家持に歌を贈っている。

〈a〉 さ夜中に友呼ぶ千鳥物思ふとわびをる時に鳴きつつもとな

大伴家持をめぐる相聞歌群(一)——女郎歌の諸相——

下句が類似した歌に

(四・六一八)

もだもあらむ時も鳴かなむひぐらしの物思ふ時に鳴きつつもと
な

(十・一九六四)

がある。但し千鳥は卷十の詠物には全くなく卷七に集中して出る。
また卷十一に二首、卷十二に一首ある。

〈b〉 ほととぎす鳴きしすなはち君が家に行けと追ひしは至りけむ
かも

(八・一五〇五)

この歌は類句も少なく先行歌に頼らずに自由に歌を作っている。
「すなはち」は「登時」と原文にはあり、この集中の孤語は漢籍の
俗語的用法に学んだ用字であり才気を見せているが、歌としては練
れていない。また千鳥とは反対にホトトギスは卷十と家持歌に集中
し卷十一・十二ではわずかに十二・三二六五歌があるのみだ。

(3) 中臣女郎

伝未詳。中臣氏は古代中央有力氏族の一つ。古事記や日本書紀の
天孫降臨神話にみえる天児屋命を祖神とする。律令制度下では中臣
氏の氏人が朝廷の神事に携わっていた。中臣鎌足は中大兄皇子とと
もに大化改新を実現し大臣の地位と藤原の氏称を賜わった。鎌足の
子不比等の系統以外はすべて中臣の氏称を名のる。中臣氏は春日大
社の歴代社司。中臣女郎はこのような有力氏族の娘である。窪田空
穂氏は「万葉集評釈」に「相応な教養を持った、その云う所から見
て、稍々年をした女性を思はしめる」と言う。

〈a〉 をみなへし佐紀沢に生ふる花かつみかつても知らぬ恋もする
かも

(四・六七五)

上句の序が、音の連想より「かつて」を導くものになっているが、「をみなへし佐紀沢に生ふる花かつみ」の美しい風景が浮かぶ働きもしている。

「をみなへし咲野に生ふる白つつじ」(十・一九〇五)や「かきつはた開沢に生ふる菅の根の」(十二・三〇五三)、「をみなへし生沢の辺の真田葛原」(七・一三四六)、「をみなへし咲野の芽子に」(十・一一〇七)の類同表現がある。「花かつみ」は集中これ一例だけで、「をみなへし佐紀沢に生ふる花かつみ」から「かつても知らぬ」とからめる表現技巧は非凡である。「花かつみ」は花あやめ、花しよぶの類かと考えるが諸説定まらず実際はわからない。「花かつみ」という名前の響きにこそ意味があり「かつても知らぬ恋」を強調する謡物的な工夫がある。類同表現を踏まえつつそれを巧みに咀嚼できる技量をもった人である。

〈c〉海の底を深めて我が思へる君には逢はむ年は経ぬとも

(四・六七六)

この歌も上二句に

海の底奥を深めて生ふる藻のもとも今こそ恋はすべなき

(十一・二七八二)

という類同表現がある。また、

かくのみやありけむものも猪名川の奥を深めて我が思へりける

(十六・三八〇四)

といった類同表現がある。

〈d〉春日山朝居る雲のおほほしく知らぬ人にも恋ふるものかも

(四・六七七)

この歌にも

春日山朝立つ雲の居る日なく見まくの欲しき君にもあるかも

(四・五八五 坂上大嬢)

春日野に朝居る雲のしくしくに我は恋まさる月に日に異に

(四・六九八 大伴像見)

と上二句が類似した歌がある。同時代の作なので影響関係は計れないが、このような類似表現が三首並ぶことを考えれば「春日山朝居る雲」という表現自体が広く流布されたものであったのだろう。また春日大社に縁の深い中臣女郎が春日山を詠んだのもその出自に關連してか。

〈e〉直に逢ひて見てはのみこそたまきはる命に向かふ我が恋やま

(四・六七八)

この歌も

まそ鏡ただ目に君を見てはこそ命にむかふ我が恋やまめ

(十二・二九九九)

よそ目にも君が姿を見てはこそ我が恋止まめ命死なずは

(十二・二九九九)

の類同歌がある。

〈f〉否と言はば強めや我が背昔の根の思ひ乱れて恋ひつつもあら

む

(四・六七九)

「否と言はば強ひめや」という問いかけが持統天皇(文武・天武の御歌との説もある)と志斐姫の強ひ語りの歌を思い起させる。

否と言へど強ふる志斐のが強い語りこのころ聞かずて朕恋ひに

けり

(三・二二六) 持統天皇

否と言へど語れ語れと詔らせこそ志斐いは奏せ強ひ語りと言ふ

(三・二二七) 志斐姫

この志斐姫は「志斐氏」の出自。『新撰姓氏録』には「中臣志斐」および「阿部志斐連」がある。また後になるが中臣清麻呂に「見むと言はば否と言はめや梅の花散り過ぐるまで君が来ませぬ」(二・四二九七)があることも付しておきたい。各句それぞれに類句が多いことも別表を見ていただきたい。中臣女郎や中臣清麻呂が強ひ語りの特徴のある表現を用いるのは志斐姫は中臣志斐の出自かも知れない。

このように中臣女郎の五首を見ていくと、「古風」と評された歌風を裏付けるように、類同歌が多く、句ごとの類似表現も多い。加えてその類句表現が、巻一、巻二の柿本人麻呂作歌、人麻呂歌集歌、山部赤人、笠金村と時代を遡り、かつ各巻に散在するところが特色である。これはその表現の引き出しが多く、教養の高いことを物語っており、また女郎の美意識も古歌へと向いていることを示している。

(4) 平群氏女郎

伝未詳。平群氏は生駒山南東麓一帯に勢力を張った古代の中央有力氏族。武内宿禰の子平群都久を祖とし、羽田、巨勢、蘇我、紀、葛城の諸氏とも同族関係があるという。雄略朝には、真鳥が大臣となり大伴連室屋・物部連目と並んで執政の大臣にあたったが、真鳥の専横のため討滅されたという。平群氏女郎はその平群氏の子孫で高貴な出の娘であったのだろう。また平群氏の本地地平群郷には平群川(竜田川)も流れている。平群氏女郎は天平十八年頃まで大伴家持をめぐる相聞歌群(一)——女郎歌の諸相——

に相聞歌を贈っており十二首が記されている。越中に家持が赴任した後も時々歌を送っていたが次第に疎遠となった。

平群氏女郎の歌は古歌を踏まえたものが多く前半は類同表現をもつ歌が多い。

〈a〉君により我が名はすでに竜田山絶える恋の繁きころかも

(十七・三九三二)

は下句に

ませ鏡見しかと思ふ妹に逢はぬかも玉の緒の絶えたる恋の繁き

このころ (十一・三三六六) 古歌集

の古歌集の施頭歌の表現をそのまま取り込んでいる。

〈b〉須磨人の海辺常去らず焼く塩の辛き恋をも我はするかも

(十七・三九三二)

須磨の海を詠んだものは

須磨の海人の塩焼き衣の藤衣間遠にしあればいまだ着なれず

(三・四一三) 大綱公人主 宴吟

須磨の海人の塩焼き衣のなれなばか一日も君を忘れて思はむ

(六・九四七) 山部赤人

があり、特に山部赤人の須磨の海人の相聞歌を参考にしているようだ。また下句には、

志賀の海人の一日も落ちず焼く塩の辛き恋をも我はするかも

(十五・三六五二) 遣新羅使

志賀の海人の火気焼き立てて焼く塩の辛き恋をも我はするかも

(十一・二七四二)

と同じ表現の歌があり、須磨の海人を詠んだ人麻呂の歌を踏まえて

十一・二七四二や十五・三三六二歌を融合させた類型的な歌である。

〈c〉ありさりて後で逢はむと思へこそ露の命も継ぎつつ渡れる。

(十七・三九三三)

上句と類同表現を追うと、

ありありて後も逢はむと言のみを堅く言ひつつ逢ふとはなしに
(十二・三一一三)

恋ひつつも後に逢はむと思へこそ己が命を長く欲りすれ

(十二・二八六八)

がある。「露の命」は新しい表現だが、「朝露の消安き命」(七・一三七五、九・一八〇四)や「後つひに妹は逢はむと朝露の命は」(十二・三〇四〇)がある。「朝露の命」から「露の命」と少し新しい表現になっているが、十二・三一一三、二八六八の表現を含み込んで歌を作っている。

〈d〉なかなか死なば安けむ君が目を見ず久ならばすべなかるべし
(十七・三九三四)

この歌は

なかなか死なば安けむ出づる日の入る別知らぬ我し苦しも

(十二・二九四〇)

と初句、二句が同じ表現の歌がある。下句の類句もそれぞれにあるが、天平初年ごろの作と推定される桜作村主益人の

梓弓引豊国の鏡山見ず久ならば恋しけむかも (一・三一一)

というような類句表現はあっても、部分部分で類同歌と言えるものではない。笠金村歌集歌にも類句はある。

〈e〉隠り沼の下ゆ恋ひ余り白波のいちらく出でぬ人の知るべく

(十七・三九三五)

この歌は

隠り沼の下ゆ恋ひ余り白波のいちらく出でぬ人の知るべく

(十二・三〇三三)

と同じ歌である。卷十二と平群氏女郎歌では表記は異なるが、歌そのものは同じである。当時は、先行歌をまるごと自分のものとして詠み贈ることも状況に応じて行われていたのだろう。

〈f〉草枕旅にしばしばかくのみや君に遣りつつ我が恋ひ居らぬ

(十七・三九三六)

「草枕」という枕詞はよく使われ集中に四九例。但し卷十二、卷十三によく用いられる。類同歌はない。各句の表現に平群氏女郎自身との類句が多くなる。これは女郎が卷十二等の歌の手本書から離れて自らの歌を作り始める兆しをはらんでいる。

〈g〉草枕旅去にし君が帰り来む月日を知らむすべの知らなく

(十七・三九三七)

「草枕」は前歌で述べたように集中に四九例。類句表現は少なくなり、自分の歌を作り出そうとしている。

〈h〉かくのみや我が恋ひ居らむぬばたまの夜の紐だに解き放けず

(十七・三九三八)

類同歌はない。但し「ぬばたま」という枕詞は集中八十例もあり、各巻に散在している。その分布状況は別表を参照されたい。また、前歌でも使用していた「かくのみや」は、再度この歌でも用いる。平郡氏女郎の二例以外はみな山上憶良の歌にあり、少々理屈っぽい表

現である。憶良の歌より影響を受け、女郎自身好きな表現であったのだろう。一途の思慕を家持に訴えたい思いが「かくのみや」を呼び寄せるのであろうか。

（i）里近く君がなりなば恋ひめやともとな思ひし我ぞ悔しき

（十七・三九三九）

表を見ても如実にわかるが、類句も減り、女郎は先行歌に頼らずにオリジナルの歌を作っている。

（j）万代に心は解けて我が背子が捻みし手見つつ忍びかねつとも

（十七・三九四〇）

「万代に」の集中の分布は別表の通り。人麻呂歌集から人麻呂、金村、憶良、旅人と用いられる。そのような古い表現を用いつつも二句目は「心は解けて」と類句のないオリジナルの表現である。三句の「我が背子が」は集中の相聞歌によく用いられた表現であるが、四句目「捻みし手見つつ」と個人的な特殊な場面を詠み込むことで、この歌全体は家持への恋情を女郎が自らの表現で歌い得たものとなっている。

（k）うぐひすの鳴くら谷にうちはめて焼けは死ぬとも君をし待

たむ

大袈裟な表現で、激情を歌うがうまくかみ合っていない。が、

「うぐひす」の集中二三例を除いて、二句以下は類句表現が少なく、女郎は彼女自身の言葉で歌っている。但し結句の「君をし待たむ」は人麻呂歌集歌（十一・二四六六）他巻十一、巻十二に多い表現である。歌の続きとしては自然にこの表現が呼び寄せられたのである。

大伴家持をめぐる相聞歌群（一）——女郎歌の諸相——

（l）松の花花数にしも我が背子が思へらなくともな咲きつつ

「松」はよく詠まれるが「松の花」は集中この歌のみ。目立たない花である。自らを地味な松の花に喩え、その花数にも思っていない家持の不実を恨む歌は女郎の気持ちをごまやかに言い表しており、窪田空穂氏が「涙さを持つており」「独自の面目を発揮したものの」（『万葉集評釈』）と評したように秀作となっている。

四

以上、家持に贈られた女王や女郎達の歌の類同性を見てきた。その傾向をいま一度整理して概略をみると次のようになる。

①重出歌 十七・三九三五（平群氏女郎）と十二・三〇二三（作者未詳）

②類同歌

（a）二つ以上の先行歌を組み合わせた歌

。四・六一四（山口女王）と十・一九三四（作者未詳）——二・二三〇（笠金村）

。四・六一六（山口女王）と十二・二八七九（作者未詳）——十二・二九八四（人麻呂歌集）——十三・三三六一（作者未詳）——十二・二九四一（作者未詳）

（b）上句あるいは下句の表現が先行歌と類似している歌。また二句につながる表現が先行歌と類似している歌

。四・六一三と十五・三七〇八（安倍継麻呂）

。四・六一七（山口女王）と十二・三一五九（作者未詳）

。四・六一七（山口女王）と十二・三一五九（作者未詳）

。四・六一八（大神女郎）と十・一九六四（作者未詳）

。四・六七五（中臣女郎）と十・二二〇七（作者未詳）——十二・

三〇五二（作者未詳）他

。四・六七六（中臣女郎）と十一・二七八一（作者未詳）——十・

三八〇四（作者未詳）

。四・六七七（中臣女郎）と四・六九八（大伴像見）

。四・六七八（中臣女郎）と十二・二九七九（作者未詳）——八・

一四五五（笠金村）他

。四・六七九（中臣女郎）と十一・三三〇四（作者未詳）他

。十七・三九三二（平群氏女郎）と十一・三三六六（作者未詳）

。十七・三九三二（平群氏女郎）と十一・二七四二（作者未詳）

——十五・三六五二（遣新羅使）他

。十七・三九三三（平群氏女郎）と十二・三二二三（作者未詳）

他

。十七・三九三四（平群氏女郎）と十二・二九四〇（作者未詳）

一句ごとの類似状況は類句表を参照していただきたい。以上のように見ていくと女王、女郎達の歌はきわめて類同歌の多いことがわかる。重出歌十七・三九三五と十二・三〇二三の例は勿論のこと、二つ以上の先行歌を組み合わせると出来上がる歌や、序が同じもの。また上句、下句の表現が同じといった類同性をもった歌が多い。当然一句のみの類同は多い。しかも類句は巻十一、巻十二を中心として巻一や巻二にも点在している。このような特質は、女郎達が先の巻々の歌を手本に学びながら歌を作っていた、そしてこれらの巻々の歌を規範としてよい歌を作ろうという美意識が働いていたためと

考えられよう。また古歌を引くことで教養の深さを誇示する傾向もある。先に述べたように彼女達は特別な歌人ではない。それ故当時の上流貴族の娘達の歌の作り方、短歌観の実態を窺うことができよう。

そうした女郎達の歌と娘子達の歌とは異相がある。河内百枝娘子、空部麻蘇娘子、安都罪娘子等の、特に巻四の歌とは違う。娘子達の歌は一句一句の類句はあるが、それ以上の類同性はない。表現の基盤が巻十一、十二にあるというだけで類同性は女郎達に比べると少ない。古歌を下敷きにすることも少ない。歌はかくあるものといった美意識に把われず率直に自由に自分の気持ちを詠んでいる。しかし、巻八の季節の相聞歌になると類同歌が多くなり様相が変わるので、娘子達の歌はさらに用例を加えて次回に比較検討していきたい。

以上、家持に贈られた女王や女郎達の相聞歌を実例として天平の上流貴族の娘達の作歌状況を辿ってみた。

【注】

。歌の本文は『日本古典文学全集・万葉集』（小学館）による。
。類句表には助詞・助動詞等に違いのある類似表現をもつ句も適宜加えた。

山口女王																			歌人名 歌番号	句 卷
4-616					4-615					4-614					4-613					
五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	
				2			1		2				1							1
				1			7			1	1		4							2
				1			3			3		5								3
2		1	1	1			5		2	3		3		1					4	
				1			2			2		2							5	
							1		1			1							6	
		1										2							7	
												1			1				8	
				1						1		2							9	
1	3						1	1				2	1	1					10	
1	1	1	1	5	2		9	1	1		1	9		2					11	
5	2	4	2	1	3		2	2				13							12	
1	1			3	2				2	2		3							13	
				1								1							14	
	1									4		5		1				1	15	
									1										16	
							1		2	1		3							17	
				1			1	1				1							18	
1				1					1	1									19	
				1						2		2							20	

【類句表】 ※表の中の数字は類同句の数

大神女郎										山口女王										歌人名 歌番号	句 卷
8-1505					4-618					8-1617					4-617						
五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初		
				1										3						1	
				1											1					2	
			2				1								1					3	
																				4	
				1																5	
													3	2	2					6	
		3		31									19	1						7	
				2					1			1		2						8	
		1		34	3		3		1			1		43						9	
																				10	
				1			1								3					11	
															3		2	1		12	
																	1			13	
				1																14	
				7			1							1	2					15	
															1					16	
																	1	1		17	
																	2	1		18	
									1	2				1				1		19	
			1	5										1	1		1			20	

中 臣 女 郎														歌人名 歌番号						
4-678				4-677				4-676				4-675								
五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	句 卷
		1												1						
							3													2
									1						1					3
					1				1	2			1							4
		3					2							1						5
		2					1		1					1						6
							1	1	2					5					1	7
		1	1						3				1						3	8
			1																	9
			1				4		4						2				4	10
			3	2			2			2		1	1	1	3					11
3	2						1		1		2	1		1				1		12
1												6								13
							1													14
1		1										1								15
												1	1							16
			3																3	17
										1			1							18
			1									2								19
			1																	20

平 群 氏 女 郎										中 臣 女 郎				歌人名 歌番号						
17-3933				17-3932				17-3931				4-679								
五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	句 卷
							1					1								
			1																	2
								1		1							1		2	3
		1	4	1										1	2	1	2			4
												1								5
								1									1			6
												1					1	2		7
																	1			8
			1		1							3					1			9
			3		3	1	1			1	2				2	5	2			10
		3	5	3	1										1	3	4			11
		1	2													1	1			12
															1					13
					1	1	1								1	1				14
																				15
																1				16
		1																		17
																				18
												1								19
																				20

平 群 氏 女 郎															歌人名					
17-3937					17-3936					17-3935					17-3934					歌番号
五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	句
				3					3			1								1
				2					2					1						2
1				5					5							1			1	3
1		1		7					7						1		1		3	4
							1													5
												2								6
										1		1								7
			1				2		1			1								8
			4					4				1		1		1			1	9
			1	3				1												10
1				4						2		1		2	1		3		3	11
			8	1				3	3	1	3	1	2				1	1	4	12
			4					4									1			13
			1					1						1		1				14
		1		4	1			4							1		1			15
																				16
			3	1		1		3				3								17
			1					1	1							1				18
		1		1				1								1				19
				4				4				2								20

重出歌

平 群 氏 女 郎															歌人名					
17-3941					17-3940					17-3939					17-3938					歌番号
五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	句
							3		1											1
							1		3								4			2
					1		2		5								2			3
							13							1			7			4
1				6			1		3							1			1	5
				4			4		6								2			6
							3										5			7
				2			5										1		2	8
				1			1										4			9
				18			9		2								3	3		10
1					1		13			1						9	4			11
4							9							1	1		8	1		12
2				1			4		4								10			13
							2													14
1							2										9	1		15
							2										2			16
				6			8		2					1		4	4	1	1	17
							2									2				18
				5			7		4							2				19
				4			5									3				20

空 部 麻 蘇 娘 子															平 群 氏 女 郎					歌 人 名
8-1562					4-704					4-703					17-3942					歌 番 号
五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	句 / 卷
											1			3			3			1
					1			1	1	1				1			1			2
					1									2			2			3
					4				1			1		13			13			4
									1					1			1			5
	1	1			2									4			4			6
					7						1			3			3			7
	1	7	2											5			5			8
		3			2									1			1			9
1	2	18	2		2					1	2	1		9			9			10
					4						2			13			13			11
								1		1	1			9			9			12
			2		1						2			4			4			13
														2			2			14
		3			1						1			2			2			15
														2			2			16
		1			1									8			8			17
					1									2			2			18
		1												7			7			19
					1									5			5			20

安 都 扉 娘 子					河 内 百 枝 娘 子										空 部 麻 蘇 娘 子					歌 人 名	
4-710					4-702					4-701					8-1621					歌 番 号	
五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	句 / 卷	
									4											1	
									2			1							3	2	
4				1	1	2			7			1							4	3	
									1			1							3	4	
									2										2	5	
1				1	1				5					1					1	6	
		1							1										21	7	
									4										1	8	
		1					1		4								1	1	15	9	
1		1			1	1			9			2		1					3	10	
2	1	1		1	1	1			8		1	1								11	
						1			10												12
				1										2							13
2									9											3	14
									1												15
		1				1			5											1	16
						1			2												17
									2											4	18
					1				3											1	19

日置長枝娘子					栗田女娘子					歌人名					
8-1564					4-708			4-707			歌番号				
五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	五	四	三	二	初	句 卷
						1	1							1	1
							4								2
1							5								3
5		1					3					3			4
1							2								5
2							1								6
2							2								7
4		1	1				1								8
1							2							1	9
4	1	5	1	1		2	2					1			10
4		1				3	9		1			1			11
6		2				1	13	1				1		2	12
				1			3							1	13
							1								14
1							5								15
1															16
3							3							1	17
2				1			1								18
		1		3											19
2							2								20